

京都市旧市街地における災害弱地域と高齢者のコミュニティに関する研究

萩原良巳・畑山満則・寺尾京子・金行方也

1. 研究背景

京都市旧市街地に多数存在している伝統的な木造家屋の町屋・長屋の存在は、京都特有の文化や歴史から形成された文化財である。このため減災目的のみによってこれらを整備縮小していくことは困難である。これは同時に、震災時の危険要素となりうる袋小路を無くすことが難しいことも意味する。また現在、我が国では急速な高齢化が進行しており、京都市は特に高齢化率の高い都市の1つである。高齢者は身体能力の低下などにより迅速な行動が困難となる。つまり高齢化社会への移行は、震災時の人的被害は拡大につながると考えられる。これらの震災リスクを軽減するため、地域でのコミュニティ活動の活性化が注目されている。そこで本研究では、高齢者のコミュニティを調査・分析することでソフト面からの震災リスク軽減を考察する事を目的とする。

2. 災害弱地域と高齢者の分布

本研究では震災時の危険要素として袋小路と高齢者に着目し、調査・分析を行う。亀田ら[1]により定義された災害弱地域指標は、京都市旧市街地に多数存在する袋小路に着目した指標である。袋小路の危険度を袋小路の形態(入り口・角・行き止まりの数)、生活者(隣接家屋数) 周辺状況(隣接道路幅、消火栓の範囲)を用いて定量化し、これを地域ごとに集計したものを、その地域の指標としている。図1に京都市旧市街地の災害弱地域分布を示す。この図と、2000年度国勢調査データを基にした高齢者の地域分布を重ねると袋小路に隣接する家屋が多い地域に高齢者の多く居住している事が分かる。

3. 高齢者のコミュニティ

高齢者が日常的に安心して居住できる環境やコミュニティをつくる事が、犯罪や災害に強い安全なまちづくりにもつながることから、高齢者のコミュニティについて考察を行う。高齢者のコミュニティには、居住地を中心としたコミュニティと施設利用によるコミュニティが存在する。前者は、町内会単位、小学校区単位のコミュニティなどが挙げられ、その単位の居住範囲内に住んでいる事で構成員となる。2章で着目した袋小路もそれ自体が居住地を中心としたコミュニティと考える。居住地を中心とし

たコミュニティは震災リスクの軽減化と最も密接に関わると考えられる。後者は、高齢者の意思を持って施設を利用することで生まれるコミュニティである。コミュニティ参加者の分布領域は時々変化し、不明確なものであるが、参加者同士の繋がりは親密である。震災により袋小路内において家々が壊滅的な打撃を受けた場合などには、居住地中心のコミュニティ内での助け合い活動が機能しない可能性があるために、もっと広範囲を対象とした地域ぐるみの助け合い活動が必要となる。施設利用によるコミュニティは、居住地区が限定されていないために、このような助け合いの基盤となり得る効果的なコミュニティであると考えられる。つまり2つのコミュニティは相補的な二重構造になっていると考えられる。本研究では特に施設利用コミュニティに着目し、分布調査と考察を行う。

参考文献

- [1] 亀田寛之・萩原良巳・清水康生：京都市上京区における災害弱地域と高齢者の生活行動に関する研究，環境システム研究論文集 Vol.28, pp.141-150, 土木学会, 2000

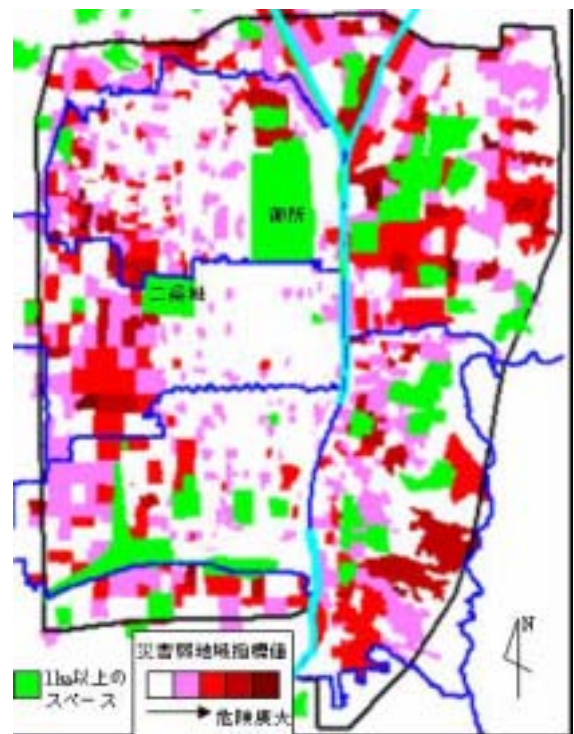


図1 京都市旧市街地における災害弱地域